利休教歌の系統と展開――百首歌を中心に――

石塚　修

はじめに

和歌（短歌）の形式を取り入れながら、芸能などの技芸や教訓を定着させる方法は、我が国の伝統の中でけっして珍しいものではない。ことに江戸時代には、思想や技芸を広く宣撫するために教歌・道歌の形式が取り入れられていった。[1] 道歌はそれ自体美的表現を意図したものではないから、文芸としては質的に低い存在であることは否定できない。何かを覚えやすくしたり記憶に定着させるために韻文を利用するという目的そのものが文芸を軽視していることにほかならないという見方もできる。そのような低俗な短歌を研究しても文芸性の探究につながらないのではないかという考え方もあるかも知れない。しかし、いかに拙劣な歌の集まりとはいえ、ひるがえって言えば、こうした営為は短歌の一受容史とも言える。短歌という形式を利用して広く「伝える」という行為を思いつくということは、短歌の持つ韻文としての特性をよく理解していた社会的背景が前提にあったからこそとも言えよう。また、今回取りあげた茶道の分野で教歌・道歌の活用がなされたのは、歌道と茶道とが密接な影響関係を持っていたからでもある。たとえば、井原西鶴の『西鶴諸国はなし』にもあるように、「花車の道」は風雅の第一の道であり、茶道はそこから派生したからこそ正当性を持った「文化」となるという見方が、[2] こうし

た教歌・道歌の成立とも深く関わっていたとも考えられる。

まず「利休教歌」について、『角川茶道大事典』の解説を見てみると、

千利休による茶道教歌を集めたと伝えるもの。裏千家十一世玄々斎宗室による「茶道教諭百首」がよく知られている……このような教歌は先行する「鷹百首」などに倣って室町時代には作り始められたとされるが、茶の湯に関しては寛永十九年（一六四二）に板行された「茶湯百首歌」が比較的早いと考えられる。その後「紹鷗百首」「遠州百首」「南坊百首」などが見られるようになり、宝暦二年（一七五二）に至って「利休茶道和歌百首」が現れる。内容は紹鷗百首・遠州百首に比して大きな差はみられない。後に収録数を増やして「茶之湯三百首」「南坊二百首」「利休三百首」なども現れた。これに類するものとして「利休教歌三十一首」がある。利休が南坊宗啓に示したと伝えられるもので、「羽箒に目に見ぬ物のかゝれるは残る心の塵やあるらむ」など、利休百首歌に比して精神性を中心に詠まれているところに特徴がある。また同種の「利休七十首」も利休が南坊宗啓に示したものといわれるが、先の三十一首に三十九首を追加したもので、点茶法や曲尺割（かねわり）など具体性に富む歌が多い[3]

ということになる。

さらに、「利休教歌」のなかでも百首であることを特徴とする「利休百首」については、『利休大事典』に、

利休が和歌に託して茶の湯の教えを示したとされる百首の歌。天正八年（一五八〇）の年記をもつ一本も伝えられるが（『千利休全集』）、玄々斎の写本には『茶道教諭百首歌』の題名がある。巻頭に茶道の心得をあげ、続いて具体的な道具の扱いが詠われ、最後に目指す境地が示される。同様のものに弟子の南坊宗啓に示したと伝える〈利休教歌三十一首〉、同じく宗啓に示したとされる〈利休七十首〉などもある。[4]

と解説されている。また、桑田忠親は「利休百首」について、

利休茶湯教諭百首ともいう。茶道の極意、点茶の技術、主客の心得などを初心者に教え諭すための道歌を百首あつめたもの。「紹鷗百首」（「続群書類従」飲食部所収）と大たい大同小異な点から推測すると、紹鷗

から授けられた百首の道歌を少々書き直して利休に伝えたものかも知れない。現在伝わっているものは、その後茶人がさらに加筆した点が多いように思う。但し、本になった紹鷗百首が果たして紹鷗の自作かどうか確認されない現在として、利休百首もなお疑問の余地がある。「浦のとま屋」「茶の湯道しるべ」「妙々茶話集」「茶道問答集」などに収められている。……百首といって、百首に少し不足するものも、百余首のものもある。なお、「利休教歌三十一首」とか、「利休七十首」などと題するものもあるが、すべて利休百首に類するものである。(5)

と解説している。さらに、『原色茶道大辞典』では、

利休の道歌・教歌を百首集めたもの。一巻。百首というがおよそ百（当百）ということである。玄々斎宗室の写本（今日庵蔵）には『茶湯教諭百首』の題名がある（茶道古典全集第十一（ママ）巻所収）。これによれば、本書はもと「茶湯百首」というような題名であったのかもしれない。なお『紹鷗茶湯百首』というのが『続群書類従』（飲食部）に収録されている。これは『利休百首』同然のものだから、「茶湯百首」にかりそめに紹鷗の名が冠されたといえよう。(6)

と解説されているが、これは『茶道古典全集第十巻』の「茶道教諭百首詠」の以下の解説に従っているものと考えられる。

『利休百首』は、また『紹鷗百首』の称で世上に伝えられていたようである。塙検校家の編集にかかる『続群書類従』に収められている『紹鷗百首』と対校すると、両者が同じいことがわかる。その状は、本文に校合をほどこしたとおりである。もちろん、若干の相違も見られるが、この程度ならば、同じと断じてもよかろう。

『利休百首』あるいは『紹鷗百首』といっても、利休なり紹鷗なりが自ら集めて一巻としたものではない。後世の人士が、利休あるいは紹鷗の道歌として伝えられていたものを集めて一巻の書としたものである。その編集年代は、なお明らかでないように聞いている。また利休なり紹鷗なりの道歌として、当時流伝してい

たものを採用したものだから、そこに誤りも少なくないと思われる。

もともと、百首という験のよい数をまづ設定し、そこに茶道人の教養として必須とする茶道精神や作法を説こうというのが編集者の企図であった。それゆえ、利休の道歌すべてをもうらするというものでもないし、編集者が自己の茶道観を以て取捨選択したということになる。また編集当時の時代色が加味されたといわねばなるまい。

これらのことは、必然的に追加や補正を促した。とくに啓蒙的なものだから、読者も用意に補正を加えることができた。そして、それぞれが流布したのであるから、若干の異同が見られることである。(7)

『群書解題第十五』にある『紹鴎百首』の解題を見ると、

茶道の書。一巻。〔作者〕武野紹鴎（一五〇二―一五五五）の作ということであるが、果たしてどうであろうか。利休百首ともいわれる。〔内容〕茶道の心得やその式法を道歌めいた和歌にして伝えたもの。百首というが、百三首ある。奥に「右百四首有」とあり、然らば一首欠けている。奥に「振舞は酢皿屏風に味噌畳亭主機嫌に天気能酒」という狂歌のような一首を添えてあるから、これで百四首となるのであろう。利休百首と題する本はなお他の歌もあるから、後人が次第に追加して行ったのであろう。(8)

となっている。

茶道関係の各事典類での「利休教歌」と「利休百首」の解説を並べたけれども、いずれも、その成立過程については、きわめておおまかな説明のままである。「編集者が自己の茶道観を以て取捨選択したということになる。また編集当時の時代色が加味されたといわねばなるまい」と解説されるものの、何がどこまで「加味」されたのか、その点についての考究は、これまでほとんどなされていないのが実状である。茶道の稽古場では、しばしば稽古のはじめに唱えられたり、稽古の最中にも茶道指導者たちがこの教歌の一節を引用しながら弟子たちに指導している場面は現在でもよく見られる。しかし、その淵源についてはあまり深く論じられることがなかったのである。

1　『吃茶詠一百四十七首』から見た利休道歌

各事典の解説を見ても分かるように、茶道文化史の上からは、利休道歌の発生について一般的に「利休百首」と「紹鷗百首」を内容的に同一視する見解がとられてきた。しかし、はたしてそうなのだろうか。

「利休教歌」（茶道百首歌）についての詳細な検討を行った筒井紘一は、こうした茶の湯に関する道歌の始源を『細川玄旨教訓百首』にあるとしている。そして「茶道百首」には「『紹鷗百首』『利休百首』『遠州百首』『南坊二百首』と称する四つが残されている」とし、現存最古のものとして『茶湯秘抄』（元文三年・一七三八　土門元亮編）に収められている宝永五年（一七〇八）に松屋久充が書写した「茶湯百首」を指摘し、今日庵文庫蔵の元禄乙丑（ただし元禄には乙丑の年はなく、乙亥か丁丑、元禄八年か十年だろうとする）の奥書のある『茶之湯百首　附続茶之湯百首』の存在を紹介する。この本の初めの九十首のあとに「利休製」とあり「慶長三年三月」の奥書があることには疑義を唱えつつも、「本書が『利休』を冠した最初であるということができる」との見解を示している。そのうえで、その成立を「元禄三年（一六九〇）に迎えた利休百年忌前後」には『利休茶湯百首』としてまとめられたことは明白である」と推定する。そして、それらが後に二百首・三百首へと発展していったとその成立過程を検証している。[9] この筒井氏の指摘は、先の事典類の解説のように「利休教歌」を単純に一系統の存在としてしまうことの危険性についても示唆するものである。つまり、「利休教歌」には、いくつかの伝本系統が存在することを前提にして調査することの必要性を導いているのである。

本稿では、この筒井氏の見解を参考として、筑波大学附属図書館所蔵『吃茶詠一百四十七首』を基に、「利休百首」の伝本のあり方について検証することとした。

『吃茶詠一百四十七首』は、縦十三・五センチ・横十八・五センチ（大本・美濃本二つ切り型）、墨付十一丁。表・裏表紙。楮紙二つ折り仮綴じ本である。大きさは、大本（美濃本）二つ切り型と判定できる。[10] 奥書に、

文化八　未四月　　直進庵写

とあり、紙の状態からも、文化八年（一八一一）当時の写本と断定してよいと考える。

『補訂版　国書総目録』および『古典籍総合目録』にも同一書名は見えず、現在のところ、本書のみが確認される。ただし書名については、題僉もないことから、おそらく便宜上付けられた可能性が高く、他の類似本との内容の比較検討を十分に行ったうえで、書名は確定すべきかも知れない。実際の収録歌数は一四五首であり、書名にある一四七首よりも少ないことから鑑みても、本書の書写が終了した段階で『吃茶詠一百四十七首』と題されたのではなく、これ以前にそのように称されていた本を書写した可能性が高いことが確認できる。

『吃茶詠一百四十七首』の一四七首という中間的な歌数は、茶人の手控え的な性質による未確定な歌数である可能性を考慮に入れても、百首から二百首へと進展していく中間の過程で編纂されたものの写本の可能性があると推定できる。[11] そこでその出自を探るべく所収歌のうち利休教歌（茶道百首歌）と重なる部分について、これまで活字本として公刊されたものを中心に他本との異同を確認した。

今回、『吃茶詠一百四十七首』との校合を行ったものは以下の八本である。

1　『紹鷗茶湯百首』[12]

奥書「文政十一（つちのへ子）年臘月念六一閲了忠瑤」（一八二八年）

2　『遠州侯茶道百首』[13]

奥書「右遠州公被吟侯茶道百首和歌以無物庵宗茶翁写之訖但一首不足之間得善本可補之整三堂旭岱子」

天保頃写（一八三〇～一八四四年ごろ）

3　『利休茶湯百首』[14]慶應大学図書館蔵

跋　「宝暦二年壬申冬十一月　名倉翰林堂」刊記「東陽　丹波屋基四郎　摂陽本屋又兵衛梓」（一七五二年）

奥書「爰にしるせる趣は、茶礼執学の人の望みにまかせ、書つゞるほどに、やがて百首に満ちぬ。俗姿俗詞をのぞくべき歌のすべもしらぬまゝ、只一道の便になしぬべきため、つねの物がたりになづらへ侍

る。ゆめゆめ他見有まじき物歟、あなかしこ。天正八年　孟春　抛筌斎千利休（花押）」

4　『茶道教諭百首詠』[15]

奥書「弘化二巳年首夏書焉　利休居士十一世孫（玄々斎）花押」（一八四五年）

5　『法護普須磨「利休居士教諭百首詠」』[16]

序　「安政三辰仲」（一八五六年）

奥書「大正四乙卯歳初春円能斎大宗匠の命ニ依り一能斎瓦秀宗猿謹模写之（花押）」

（一九一五年）

6　『茶之湯百首　全　附続茶の湯百首』[17]

奥書「百首奥書　此百首は利休宗易老人の詠作なり好事者宜暗誦写　慶長三年　三月日」

「続百首奥書　元禄乙丑三月上巳後一本陳老翁書干武陵僑居一枝庵下松猿写」

7　『茶湯秘抄』[18]

奥書「元文三年戊午夏六月下浣繕写　南京土門元亮世明」（一七三八年）

「百首奥書　宝永五年子ノ二月廿日　久充写之」（一七〇八年）

8　『茶湯秘抄』[19]

奥書「天保五年午年八月写之　　与七郎安倫控」（一八三四年）

「百首奥書　宝永五年子の二月　日　久充書写之」（一七〇八年）

なお、『国書総目録』によると、『利休百首』の一本が東京教育大学蔵の町野庸次編『燈下雑記』巻二十一にあると指摘されているが、今回の調査で、当該の巻二十一は欠本であることが判明した。『国書総目録』は、『東京文理科大学附属図書館和漢書分類目録』には所蔵が記載されているので、これによっていると考えられる。

これらの諸本と『吃茶詠一百四十七首』を校合した結果、本文にも配列にも異同が見られた。とくに配列について整理すると図表1～3のような結果になり、『吃茶詠一百四十七首』の配列は、『紹鴎茶湯百首』に近い系統

に属していることが判明した。

さらに、他本との校合を整理すると、「利休教歌」（茶道百首歌）には少なくとも大きく三系統があることが認められた。この点については、利休教歌（茶道百首歌）の全伝本を完全に精査せずに、三系統として結論づけてしまうのには問題が残るものの、少なくとも現在一般に広く知られている『茶道教諭百首詠』・『法護普須磨』系統とは配列の異なる百首歌が、現段階で他に二系統確認できた。

具体的には、『吃茶詠一百四十七首』および『紹鴎茶湯百首』と『遠州侯茶道百首』の系統、『茶道教諭百首詠』と『法護普須磨「利休居士教諭百首詠」』の系統、『利休茶湯百首』および『茶之湯百首　全　附続茶の湯百首』と『茶湯秘抄』系統という三つの配列系統が認められるということである。表から照らしても、歌の配列や採録について、この系統ごとで似たような傾向が見られることがわかる。

この結論については、矢野環が別して「利休教歌」（茶道百首歌）の本文を調査されており、同様の結論に至っていることもあわせて紹介しておく。[20]

先に示したように各事典類などの解説の多くは、その内容を「大同小異」として「同内容」であると扱ってきた「利休教歌」（茶道百首歌）には、内容の異同のみならず、配列においても編者による改変がなされてきたことが確認できたのである。

とくに『茶道教諭百首詠』・『法護普須磨』は、他系統の百首歌とは異なる独自の配列・選歌の傾向を明確に持っていることが確認できる。そのことはこの選定に深く関与した裏千家十一世玄々斎宗室（一八一〇～一八七七）の茶道にたいする理念のあり方と当時の茶道界のありようをも窺わせるものである。

2　『茶道教諭百首詠』・『法護普須磨』にみられる「利休教歌」（茶道百首歌）の編集意識

なぜ『茶道教諭百首詠』・『法護普須磨』に強い編集意識が認められるのかというと、その第一の理由として、

「百首」を概数ではなく確定数として整えている点が挙げられる。他の本の中には「百首」とは冠していてはいるものの、『紹鴎茶湯百首』が百四首、『茶之湯百首　全　附続茶の湯百首』が九十首、『茶湯秘抄』が九十二首となっており、その歌数は明確ではない。もともと和歌の「百首歌」そのものは「百」という定数歌であったけれども、こうした教歌の場合の「百首」は厳密に定数歌になっていないものが少なくないようである。そうした中でこの二本だけが「百首」に整えられている点から、積極的に編集意識がはたらいていると見るべきではなかろうか。

さらに、この二本には、以下のAからEのような他の本とは異なる歌の異同も見られる。

『吃茶詠一百四十七首』・『紹鴎茶湯百首』	『茶道教諭百首詠』・『法護普須磨』
A	
59　炭置も習ひ斗りにかゝはりて 　湯のたきらさる炭は消し炭	23　炭置もたとへならひにそむくとも 　湯のよくたきる炭は炭也
60　炭置もたとへならひにそむくとも 　湯のよくたきる炭は炭也	24　客になり炭次ならはいつとても 　薫もの抔はくへぬ物なり
61　客になり底とるならはいつとても 　囲炉裏の炭をくつし崩な	25　炭置は五徳はさむな十文字 　縁をきらすなつり合をみよ
62　炭置は五徳はさむな十文字 　縁をきらすなつり合を知れ	26　崩れたる白炭あらはすておきて 　またよき炭を置物そかし
63　崩れたる白炭あらはすておきて 　まきよき炭を置ものそかし	27　炭置もたとへならひに背とも 　湯のたきらさる炭は消し炭
64　風炉にては炭はなきもの見ぬとても	28　崩たる其白炭をとり揚て

65　見ぬ社猶も見ると知へし
　客になり風炉の其内見るときは
　灰崩なん気遣をせよ

29　またも又置事はなきなり
　風炉の炭みる事はなし見ぬとても
　見ぬこそ猶も見ると知へし
30　客になり底とるならはいつとても
　囲炉裏の角を崩しくつすな
31　客になり風炉の其内見る時は
　灰くつれなん気遣をせよ

このAの部分は、炭点前についての部分になる。炭点前のここでの歌の配列を見ると、『吃茶詠一百四十七首』・『紹鴎茶湯百首』と『茶道教諭百首詠』・『法護普須磨』の配列とは異なるものになっている。61は、炉の後炭の炭所望点前についての歌であるが、24は初炭・後炭所望に通じる客の心得の歌に変えられている。そして、61が30の位置に下げられているのは、初炭点前と後炭点前の区別を意識的にしたためとは考えられないだろうか。

B

67　絵にも又左右真向もありそする
　もし又床の勝手にもよる
68　こしき釜はいろり縁より六七歩
　高くすゆるをよきと社聞（け）
69　姥口は囲炉裏縁より六七歩下けて
　すゆるを習いとそ聞

34　冬は釜囲炉裏縁より六七歩
　高くすゆるか習なりける
35　絵にもまた左右むきむかふむき
　有しも床の勝手にそよる
36　姥口は囲炉裏縁より六七歩下けて
　すゆるか習いとそ聞

Bでは、釜の歌が68・69と二首続いていたところに、67の絵の歌を挟み込んでいる。続けることが覚えやすいという考え方と、変化を持たせた方が覚えやすいという考え方があろうが、ここは変化を持たせたと考えるべき所であろう。

C

134　余所なとへ花を送らはそのはなの
　　ひらき多くはやらぬもの也

135　釣舟は鎖りのあいだ八寸に
　　出舟入ふねささは置ふね

136　壺などを床にかさらむ心あらは
　　花より上にかさるもの也

137　夏手前かならす釜に水さすと
　　一すしに云ふ人はあやまり

138　夏なりと湯のたきらすはふたメて
　　なとあやまりになりはせましそ

139　水さしに手桶出さはふたはまた
　　まへのふた取上へ重ねよ

42　余所なとへ花を贈らは其花の
　　ひらき過ぎしはやらぬ物なり

43　水さしに手桶出さは蓋はまた
　　まへのふたとり先へ重ねよ

……

78　釣舟は鎖の有無室により
　　出舟入ふねまたは浮舟

79　壺なとを床にかさらむ心あらは
　　花より先に飾をそよき

80　夏手前かならす釜に水さすと
　　ひとすしに思ふ人は誤り

81　夏なれと湯のたきらすはふたメて
　　なと誤りになりやせましを

Cの部分は、『利休茶湯百首』と『茶湯秘抄』と同じ配列を示している部分であり、独自の作為と言うよりも、

おそらくは元とした本文の配列をそのまま踏襲しているために起こった異同であると推測できる。

D

74　茶入より其茶すくはゝ心得て
　　初中後ことに心置へし
75　△茶をふらは手先てふると思ふなよ
　　肘にてふるをそれかひく也
76　湯を汲はひしやくに心月の輪の
　　そこねぬよふに心得て汲め

47　茶入より茶をすくふには心得て
　　初中後すくへ夫ケ秘事なり
48　湯を汲は柄杓に心月の輪の
　　そこねぬやうに覚悟して汲
……
52　茶をふらは手先をふると思ふなよ
　　臂にて振そそれが秘事也

Dは、76のように柄杓の扱いに関する歌を先に出し、52の茶筅の歌を後にしたために起きた配列の変化と考えられる。茶の湯の点前の順序として、柄杓で湯を汲んで茶碗に注ぎ、茶筅で茶を点てるという順序に従って整えたものと言えよう。

E

46　茶を点は茶筅に心よくつけて
　　茶碗の底につよく当るな
129　目にて見よ耳にふれつゝ香をかきて
　　事を問つゝよく合点せよ

91　稽古とは一よりならひ十をしれ
　　十より帰る本の其一
92　茶の湯をは心に染て目に懸す
　　耳をそはめて聞く事もなし
93　茶を点は茶せんに心能付て

130　稽古とは一より習ひ十をしれ
　　十よりかゑるもとの其一
131　習ひをば塵（チリ）あくたそと
　　是をしれ書物は反古腰はりにせよ

94　ちゃ碗の底につよくあたるな
　　眼にも見よ耳にもふよかをきゝて
95　ことにとひつゝ能合点せよ
　　習ひをば塵芥とそ思へかし
　　書ものは反古腰張にせよ

Eは百首に整えるために、玄々斎が加えた部分であり、そこに46の歌が混入しているのは、おそらくは初案では削除の対象であったものを最終的に整備する際に、再度挿入したと考えるべきであろう。

『茶道教諭百首詠』ではさらに以下の歌を続けている。

96　水と湯と茶巾茶釜に箸楊枝柄杓と心あたらしきよし
97　茶はさひて心は厚く持なせよ道具はいつも有合よし
98　茶の湯には梅寒菊に木葉み落青竹かれ木あかつきの霜
99　茶の湯とは只湯を沸し茶を点て飲はかりなる事を知へし
100　本来もなきいにしへの法なれと今そ極る本来の法

この五首には玄々斎宗室が和歌で茶の湯の教導を意図したことが明確に現れている。彼自身も和歌の詠み手として長じた才能を持っていたことは、今日庵の歴代の中でも遺作の多い家元の一人であることからわかる。また茶の湯の業と和歌とを深く関連づけて考えていたことは、「半白の歳旦大福点茶に家例の和巾を用ひ始めければ」として、

明てけさ茶色のふくさうち捌き千とせの春をかぞへそめけむ[21]

という歌の作り方からも窺える。さらに、玄々斎は和歌を茶の湯の習得において意義ある存在として評価していた。そのことは安政三年（一八五六）の「稽古の席掟」に

一　先祖己来教示の詩歌
　　文章の意可有会得事[22]

としていることからもわかる。この年は『法護普須磨』が整えられた年でもあり、和歌の存在を流儀の定着に生かそうとした玄々斎があったことは確実であろう。

こうした立場から96から100の歌を見直すと、彼の「わび茶」の本意が提示されていることが容易に理解できる。96の「あたらしさ」の提唱は、『茶話指月集』にみられる、

さる田舎の侘、休へ金子一両のほせて、何にても茶湯道具求て給ハれと也、休、この金にて、残らす白布を買てつかハすとて、侘は何なくても、茶巾だにきれいなれハ、茶ハのめるとそいひやりてける[23]

の挿話などと対照すると、侘び茶が本来目指していく理想として理解できよう。98の歌も、枯れ葉がみな黄ばみ落ちた後に見る口切りの垣根の「青竹」を見いだす茶の湯をあり方を強調している。99も「利休七則」といわれる

一、花は野の花のやうに
一、炭は湯の沸くやうに
一、夏は涼しく
一、冬を暖かに
一、刻限は早めに
一、降らずとも雨の用意
一、相客に心をつけよ

右の通り相心得申す可き事、とかく茶ノ湯ハ結構を好まず、きれいにさびたる様仕る可く候

（東京芸大所蔵「利休七箇条」）[24]

といった「侘び茶」の精神性に則った歌と言える。

弘化二年（一八四五）奥書の『茶道教諭百首詠』は、やがて安政三年（一八五六）奥書の『法護普須磨』へと編集を重ねられた。その変更がF・Gである。

F　『茶道教諭百首詠』にはあるが『法護普須磨』では削除された歌

81　夏なれと湯のたきらすはふたメてなと誤りになりやせましを

82　兼てより約束しける客ならはこゝろは真にわさは軽かれ

G　『法護普須磨』にのみみられる歌

46　掛ものゝ釘打ならハ大輪より九分さけて打くきも九分なり

100　規矩作法護り尽くして破るとも離るゝとても本をわすれな

FとGは、玄々齋自身で81から46へ点前の手続きの問題としての変更したと考えられる。82は「わざは軽かれ」の表現に問題を覚えたためかとも推測できる。100は、最終的に百首の掉尾を飾る一首としておかれたものであり、「守・破・離」という日本の伝統文化に見られる理念を茶の湯に取り入れて詠んでいるものである。

玄々斎は、天保十四年（一八四三）の『喫茶敲門瓦子』のなかでも「守・破・離」をとりあげ、「弟子守を習ひ尽し、能成候へハ、自然ト破ル」と示していることから、この理念を大切にしていたようである。[25]

H　『茶道教諭百首詠』『法護普須磨』では削除された歌

51　棗にてこゆ茶を点はいつとても蓋する時に和巾にてふけ

58　我のみしすゝきの跡をいたゝき（て）（呑は）誤るあしらひと聞
70　輪口をは姥口すへにするもよしされとも恰好見合にせ□（よ）
83　香合かくわんか羽箒かさりおかは右羽左羽吟味しておけ
94　薄板の長さ一尺三寸　有横の広さは九寸とそ聞
103　絵によりて花に心は多からん風にたてつく草花はなし
111　小壺にて茶をたつるに□□□□汲ともいはすさしぬくといふ
（はすくふとも）
142　茶杓にてこほしをたゝく人多しとても和巾てふくものぞかし
144　中央にきやうしこしさす其時は灰出しきり火はし右なり

「利休百首」のなかから、日の九首が削られた歌である。それぞれの削除の根拠を当時の点茶作法を克明に追って吟味する必要性があるかも知れないけれども、すくなくとも点茶の手続き上の問題からこれらが削除されたであろう事は想像できる。

玄々斎は、点前が時代にそぐわなくなった教歌を削除して、精神性のある歌を加え、百首という定数に整えることで自己の家元としての権威を保全しようとした。この姿勢は、明治維新をきっかけとして茶道各家元に芸人鑑札を下付しようとしたことに反対して、明治五年（一八七二）に三千家を代表して京都府知事長谷川信篤に対し「茶道の源意」を建白し、

……斯業を教諭の道故に茶会の規矩厳重礼節正敷五体崩さず、誠心を以て執行なす事業也。依而纔か薄茶一点中にも此意趣悉皆顕然と表示畢
衣食住道具も路地も奢りなく
誠意を励む茶味の明くれ[26]

と主張した玄々斎の意気込みとも相通じている。茶の湯を習い事ではなくして、国家として正統に継承されるべき伝統文化として扱うべきだとした玄々斎の強い意識が、「利休教歌」を明確に百首に整え、最終部分に教訓性の高い歌を配することにもつながったとみるべきであろう。

（1）石塚修「『道二翁道話』における韻文利用について」桑原博編『日本古典文学の諸相』平成九年　勉誠社　六六九～六八六頁

（2）『西鶴諸国ばなし』巻五の一「灯挑に朝顔」に「心ある人は歌こそ和国の風俗なれ。何に寄らず、花車の道こそ一興なれ」とある。

（3）林屋辰三郎ほか『角川茶道大事典』平成九　項目担当　谷端昭夫　一四二五頁

（4）千宗左ほか『利休大事典』淡交社　平成元　七二九頁

（5）桑田忠親『茶道辞典』東京堂出版　昭和三一　六一三頁

（6）井口海仙ほか『原色茶道大辞典』淡交社　昭和五五　九三六頁

（7）千宗室（淡々斎）編『茶道古典全集第十巻』淡交社　昭和三一　一四八～一四九頁

（8）続群書類従完成会編『群書解題第十五』　続群書類従完成会　昭和三七　一二二頁

（9）筒井紘一『茶書の系譜』Ⅳ―2「道歌の成立と展開」　淡交社　二〇〇三　三九一～四三二頁

（10）中野三敏『江戸の版本』　岩波書店　一九九五　六六頁　に「（大本二つ切り型は）小ぶりなもので縦一四横二〇センチ当たりが標準か」との指摘がある。

（11）この歌数については、佐伯孝弘氏より「百首」と「いろは四十七」との組み合わせでないかとのご示唆を頂いたが、今回の考察ではその結論までは導けなかった。

（12）塙保己一編・太田藤四郎補『続群書類従』第十九輯下　続群書類従完成会　大正十三発行・昭和三十二訂正三版四四七～四五三頁

（13）旭岱子『墨海山筆』所収　内閣文庫蔵　国文学研究資料館マイクロフィルム

（14）鈴木半茶編『千利休全集』『やきもの趣味』臨時増刊号　昭和十六
鈴木半茶は「天正八年の奥書は信ずることは出来ないと思ふ」と指摘する。

(15) 千宗室校注『茶道古典全集』第十巻　淡交社　昭和三一　一三三～一五〇頁
(16) 茶道資料館編『近代黎明期の茶の湯　裏千家玄々斎宗室の時代』　平成十三年　一七八～一八〇頁
(17) 今日庵文庫蔵　写本　今日六三〇　チャノ　一〇六六七
(18) 石水博物館所蔵　神津朝夫ほか翻刻・名和修校閲『茶の湯文化学』7　二〇〇〇　六六～一一七頁
(19) 東大寺博物館所蔵　マイクロフィルム
(20) 矢野環氏より茶の湯文化学会の発表題目公開後同様の調査を別系統でされている旨の連絡を頂き、合わせて同様の結論になっていることの教示をいただいた。
(21) 茶道資料館『徳川斉荘公と玄々斎宗室』展図録　平成十五年　他にも「今日庵九景」・「詠月十五首」といった歌業が散見できる。
(22) 茶道資料館編『近代黎明期の茶の湯　裏千家玄々斎宗室の時代』　平成十三年　一八六頁
(23) 久須美疎庵『茶話指月集』千宗室校注『茶道古典全集』第十巻　淡交社　昭和三一　二〇九頁
(24) 林屋辰三郎ほか『角川茶道大事典』平成九「利休七則」(担当　筒井紘一)　一四二六頁
(25) 納屋嘉治編『玄々斎精中居士』淡交社　昭和五一年　一九三頁
(26) 茶道資料館『徳川斉荘公と玄々斎宗室』展図録　平成十五年　三三頁

＊表の「その他」の「州」は『石州三百ヶ茶』、「宗」は『宗甫公茶湯教訓百首和歌』(筒井紘一『茶書の研究』Ⅳ「数奇と首歌」による)を示す。

本稿は平成十六年度第十回茶の湯文化学会大会での研究発表を元にしたものである。発表の席上ご助言を下さった谷晃氏をはじめ、資料の閲覧をお許し下さった今日庵文庫等の各機関にも記して謝意を表します。

茶道百首歌校合表－1

	喫茶	紹鷗	遠州	利休	教諭	法護	今日	東大	石水	そ　の　他
1	34	1	1	1	1	1	1	1	1	
2	35	2	2	2	2	2	2	2	2	
3	36	3	3	3	3	3	3	3	3	
4	37	4	4	4	4	4	4	4	4	
5	38	5	×	5	5	5	5	5	5	
6	39	6	5	6	6	6	6	6	6	
7	40	7	6	×	7	7	×	×	×	
8	41	8	7	7	8	8	7	7	7	
9	42	9	8	8	9	9	×	8	8	
10	43	10	9	9	10	10	8	9	9	
11	44	11	10	×	11	11	×	×	×	
12	45	12	11	10	12	12	9	10	10	州81
13	46	13	12	11	93	92	10	11	11	州87
14	47	14	13	12	13	13	11	12	12	
15	48	15	14	13	14	14	12	13	13	州69
16	49	16	15	14	15	15	13	14	14	州69
17	50	17	16	15	16	16	14	15	15	
18	51	18	17	16	×	×	15	16	16	
19	52	19	18	17	17	17	16	17	17	
20	53	20	19	18	18	18	17	18	18	
21	54	21	20	19	19	19	18	19	19	
22	55	22	21	20	20	20	19	20	20	
23	56	23	22	21	21	21	20	21	21	
24	57	24	23	22	22	22	21	22	22	
25	58	25	×	23	×	×	22	23	23	
26	59	26	24	×	27	27	×	×	×	
27	60	27	25	24	23	23	23	24	24	州76　宗イ
28	61	28	26	×	30	30	×	×	×	
	×	29	27	25	24	24	24	25	25	客になり炭置　州72
29	62	30	28	26	25	25	25	26	26	州76
30	63	31	29	27	26	26	×	27	27	州72
	×	32	32	28	28	28	26	28	28	崩れたるその白炭は　州72
31	64	33	30	29	29	29	27	29	29	
32	65	34	31	30	31	31	28	30	30	
33	66	35	33	31	32	32	29	31	31	
	×	36	34	32	33	33	30	32	32	絵のものを懸ける時
34	67	37	35	×	35	35	×	×	×	
35	68	38	36	33	34	34	31	33	33	
36	69	39	37	34	36	36	32	34	34	

茶道百首歌校合表－2

	喫茶	紹鷗	遠州	利休	教諭	法護	今日	東大	石水	そ　の　他
37	70	40	38	35	×	×	33	35	35	
38	71	41	39	36	37	37	35	36	36	
39	72	42	40	37	38	38	34	37	37	
40	73	43	41	38	39	39	36	38	38	
41	74	58	55	48	47	48	49	48	48	
42	△75	59	56	×	52	53	×	×	×	宗ロ
43	76	60	57	49	48	49	50	49	49	
44	77	×	×	×	×	×	×	×	×	
45	78	61	58	50	49	50	51	50	50	
46	79	62	59	51	50	51	52	51	51	
47	80	63	60	52	51	52	53	52	52	
48	81	64	61	53	53	54	54	53	53	
49	82	65	62	54	54	55	55	54	54	
50	83	66	63	55	×	×	56	×	×	
	×	×	×	×	55	56	×	×	×	羽箒は風炉に右羽
51	84	67	64	56	56	57	57	55	55	
52	85	68	65	57	57	58	58	56	56	
53	86	69	66	58	58	59	59	57	57	
	×	【69】	67	59	59	60	×	58	58	ともし火に陰と陽との
54	87	70	68	60	60	61	60	59	59	
55	88	71	69	61	61	62	61	60	60	
	×	72	70	62	62	63	62	61	61	いにしへは名物などの
	×	73	71	63	63	64	63	62	62	夏などは炭も菜籠
56	89	【73】	72	×	×	×	×	×	×	
57	90	74	73	64	64	65	64	63	63	
58	91	75	74	65	65	66	65	64	64	
59	92	76	75	66	66	67	66	65	65	
60	93	77	76	67	67	68	67	66	66	
61	94	78	77	68	×	×	68	67	67	
62	95	79	79	69	68	69	69	68	68	
63	96	80	×	70	69	70	70	69	69	
64	97	81	80	71	70	71	71	70	70	
65	98	82	81	72	71	72	72	71	71	
66	99	83	82	73	72	73	73	72	72	
67	100	84	83	74	73	74	74	73	73	
68	101	85	84	75	74	75	75	74	74	
69	102	86	85	76	75	76	76	75	75	
70	103	87	86	77	×	×	77	76	76	
71	104	88	87	78	76	77	78	77	77	

茶道百首歌校合表－3

	喫茶	紹鴎	遠州	利休	教諭	法護	今日	東大	石水	そ　の　他
72	105	89	88	79	77	78	79	78	78	
73	106	90	89	83	82	×	80	82	82	
74	107	91	90	84	83	82	81	83	83	
75	108	92	91	85	84	83	82	84	84	
76	109	93	92	×	86	85	×	×	×	
77	110	94	93	86	85	84	83	85	85	
78	111	95	94	87	×	×	84	86	86	
79	112	96	95	88	87	86	85	87	87	
80	113	97	96	89	88	87	86	88	88	
81	114	98	97	90	89	88	87	89	89	
82	115	99	98	91	90	89	88	90	90	
83	116	100	99	×	×	×	89	×	×	
84	129	101	×	×	94	93	×	×	×	
85	130	102	×	92	91	90	90	91	91	
86	131	103	×	×	95	94	×	×	×	
87	132	44	42	39	40	40	37	39	39	
88	133	45	43	40	41	41	38	40	40	
89	134	46	44	41	42	42	39	41	41	
90	135	47	45	80	78	79	40	79	79	
91	136	48	46	81	79	80	41	80	80	
92	137	49	47	82	80	81	42	81	81	
93	138	50	48	×	81	×	×	×	×	
94	139	51	49	42	43	43	43	42	42	
95	140	52	50	43	44	44	44	43	43	
96	141	53	51	44	45	45	45	44	44	
97	142	54	52	×	×	×	×	×	×	
98	143	55	53	45	×	46	46	45	45	
99	144	56	×	46	×	×	47	46	46	
100	145	57	54	47	46	47	48	47	47	
	×	×	×	93	92	91	×	92	92	茶の湯をは心に染めて
	×	×	×	×	96	95	×	×	×	水と湯と茶巾茶釜に
	×	×	×	×	97	96	×	×	×	茶はさびて心は厚く
	×	×	×	×	98	97	×	×	×	茶の湯には梅寒菊に
	×	×	×	×	99	98	×	×	×	茶の湯とは只湯を沸かし　南方
	×	×	×	×	100	99	×	×	×	本来もなきいにしへの
	×	104	×	×	×	×	×	×	×	振舞は酢皿屏風に
	×	×	×	×	×	100	×	×	×	規矩左法護り尽くして
	×	×	×	×	×	×	×	×	×	茶の法は教の外を行く　宗ニ
	×	×	×	×	×	×	×	×	×	まよはぬは迷うもおなし　宗ホ